山形大学附属郷土博物館報 2

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY　1975 10. 1

目　次

運営の方向　――大学附置「研究施設」を目指す―― …… (1)
山形県にみる「風祭」行事 …… (1)
霊峰鳥海山 …… (2)
郷土博物館所蔵史料と経済史料 …… (3)
予習不足で博物館まいり …… (5)
郷土博物館成立の思い出 …… (5)

運営の方向
――大学附置「研究施設」を目指す――

館長　工藤定雄

館報第二号を発刊する運びになった。創刊号につづいて，本号に寄せられた原稿は多彩であり，学内外に対する本館紹介に寄与するところ大きいものと思われる。

「博物館に相当する施設」としての本館が「大学の附属施設」として指定されたのは，昭和三十年十二月（文部省告示百八号）。いっしょに表札を掲げた滋賀大学経済学部史料館が，国立学校設置法施行規則の適用に該当するものとして，同大学経済学部附属の「研究施設」に認定された（昭和三十九年四月一日文部省令第十一号）。本館は今も尚「相当施設」のままである。「相当施設」と「教育または研究施設」との間には距離がある。管理系統の差異の外に，人事・予算的措置を獲得する為には後者の「研究施設」認可が必須であって，「相当施設」には人事・予算的措置の道がない。

昭和四十八年以来，本館に運営費として，一部予算的措置が認められた（館報一号）ことに付いては，二つの理解が必要である。一つは，昭和三十七年以降「設置法（略称）施行規則」による「施設」認可へのワンステップである。第二は，従来大学学部附置の研究施設への体制づくりが必須であるとされていたが，学部附置のものの外に，大学附置の研究施設認可の道が開けて来たことである。これが，昭和三十九年施行の「設置法施行規則」の一部改正に基ずくのか，或は運用上の展開に因るものか，その詳細については承知していない。ただし，同規則第二十条第三項によると，「当該学部又は当該附置研究所の教授又は助教授」を以って，「施設」の長に充てるとあるから，長に限らず大学の職員を以って運営出来る道と読みかえたことにあるのであろうと考えられる。このことは，規模の比較的小さい新制地方大学の総合性を拡充してゆく行政上の配慮に通ずるかと思われ，あかるい措置である。

本館の拡充発展の上で，「教育又は研究施設」への道が必須で，これは議論の余地はないが，研究施設として諸条件整備推進のポイントは，学内（小白川・飯田・米沢・鶴岡キャンパス）各学部・各研究室との相互利用，密接な連繋の実現にあることが自明になってくる。人文・社会・自然各部門における「教育又は研究」上，相互補完の道について，総論的には館報創刊号において若干述べているが，本号において更に各論的提言がなされていることは貴重である。森・石島・江田・今田(敬称略)各論稿は，前号における大津，青木論稿と共にゼミ・研究室との結付に付いて具体的な示唆がなされている。前館長，長井氏（現東北学院大学教授）と共に各届けられた玉稿に深謝すると共に，国の行政措置に対する学内行政措置の方途をさらに一歩進めなければならないと考えるのである。

（教育学部　教授）

山形県にみる「風祭」行事

江田　忠

二百十日前後に風鎮めの祈願を行う習俗は各地にみられるが，西角井正慶編『年中行事辞典』によると，二百十日というのは徳川幕府の暦編纂係であった渋川春海が品川の一老漁師から教えられたものだという。春海は大の釣り好きで江戸品川の海に舟を出そうとしたとき，一人の年老いた漁師が海上の一点の雲を指し，今日は立春から数えて二百十日に当るが，五十年来の経験によるとこのような時は大荒れになるから釣に出るのはやめた方がよいと注意した。果してその日は昼すぎから大暴風雨になった。後に春海は「貞享暦」を編纂するわけだが，そのときこの二百十日を採り入れたのがはじめで，以後の暦にも雑節の一つとして記入されるようになったもの

のようである。

それはともかく，山形県内でも二百十日あるいはその前夜に「カザマツリ」（風祭）と称して，農作物を風水害から守り豊作を祈る行事が行われてきた。

置賜地方では，「二百十日には田に入るな」というところが多い。田の水をうごかすと天候が荒れるなどともいう。米沢市三沢の赤芝部落では，二百十日に稲穂をむいて十二粒（閏年は十三粒）を床の間の神に供えていたし，同じ三沢の簗沢でも，この日初穂をとってきて床の間に供え，お神酒をあげておまいりをする。米沢市万世町梓山では田から籾七粒をとってきて田の神に供える。このような初穂を神に供え風水害予防の祈願を行うことを「イナホアゲ」と呼ぶところもある。「風祭に初穂をむいて供えられるぐらいの年は豊作」だといっている。

戦前まで，三沢の簗沢ではこの日「神おくり」（疫病神おくり）が行われていた。綱木川や大樽川の流れに沿って上の部落から下の部落へと疫病神を送っていくのだが，各部落では，部落の中央で法印に祈禱してもらい，「風祭」と書いたお札をいただく。このお札は大切にしまっておいて翌年田植のとき田の水口に立てたという。部落の各家では団子をつくりこれを軒端にさげておく。「神おくり」の行事が終り，次の部落に法印が行くと，子供たちはこの団子をたべ歩いた。

西置賜郡白鷹町周辺の農村では二百十日の前夜，現在では部落公民館に男衆が集まり，法印から「風祭」のお札（風の字が書いてある）をうけ，これをヨシにはさんで田の水口に立てているし，南陽市漆山地区でも，二百十日には法印様から風水害よけのお札をもらい，ヨシにはさんで田の水口に立てる。東置賜郡高畠町安久津では，二百十日の前日田の神にお神酒を供えて風水害のないように祈り，二百十日当日は「風祭」といって仕事を休むという。西置賜郡飯豊町高畑では，「風祭に風邪をひくと一生なおらない」といった俗信もきかれた。

村山地方では，二百十日に長い竿の先に鎌を結びつけ，これを「アキ」の方に立てるという習俗がある。「風切りよく」の意で風よけのまじないだという。（上山市山元地区元屋敷，寒河江市本楯など）

西村山郡朝日町栗木沢には，昔二百十日の前夜，「嵐除けの風神祭」とか「嵐追い」といって，部落中の各家から提灯を持って集まり，部落内を一巡したあと終ったところで参集者全員が「ワーッ」と勝どき声をあげる行事があった。

もっとも，こうした風祭のさまざまな行事も現在ではあまり行われなくなったが，それでも二百十日ないしはその前夜を「風祭」と呼び，村中で氏神に風よけの祈願をしたり，豊作を祈ったり，二百十日は一日仕事を休むというところは多い。最上郡真室川町などでは，村中で氏神に風水害の防除を願ってお神酒を供え，村人たちも酒宴をひらいているし，先頃調査した寒河江ダム水没地区の一つ砂子関でも，二百十日には部落の男衆が山の神々社に集り，お神酒を供えて風水害のないよう祈願をしている。

山形県内の年中行事や農耕儀礼の調査をはじめてもう五，六年になるが，郷土博物館の民俗資料のなかにも，こうした無形文化財の写真やスライド，あるいは映画などもぜひ加えておきたいものである。

（工業短大教授　郷土博物館運営委員会委員）

霊峰鳥海山

今田　正

山はすべて生れてから現在までの歴史をもっている。火山の場合は有史いごのできごとは噴火史とよばれ，火山活動の様子が物語り式にくわしくかゝれている。なかには図解式（いまでいうスケッチ）のものがあり専門的にも興味ぶかいが，古文書としての価値のたかいものもある。一般には噴火史の史実の立証はたいへんむづかしいが，鳥海山のように，山頂に神社などがあると史実をたしかめやすい。そのわけは，鳥海山の噴火のたびごとに，お山の安泰と神威の発現を崇め，この地方を司る出羽守が時の朝廷に神社の格上げを奏上するからである。一つの例として，三代実録34に元慶2年8月4日奏言したことを噴火の様子とともに漢文調でくわしく記されている。いまの知事が噴火があると政府に地震計などを陳情するのとにていて興味深かいものがある。

山頂にある大物忌神社はなんの神であるか神祇にうとい筆者には分らない。だがこゝに信仰をもとめてくる人達は農業漁業を営むものが多い。かつては軍神としても崇敬されたらしい。何がともあれ時の朝廷は荒れ狂う火山の噴火をみて大物忌神社の位をあげ神の御威光をしめした。神の威光は朝廷の権威につうじ，都から遠くはなれた草深い出羽国を治める一方法であったのであろう。鳥海山麓の人達は地震をともなった噴火・鳴動におそれおののき，冷害（異常気象）による飢饉にうちひしがれ，ただただ〝神のいかり〟としてつよい信仰心がつちかわれてきた。鳥海山を霊峰とよび自からの襟を正し，山の幸の恵みをうけ先祖からの生活をうけついできた。こゝの人達の生活は即自然であったのだ。あくまでも素朴で美しい。

この霊峰鳥海山が153年ぶりに生きかえった。昭和49年3月1日という日に。すなわち近代科学の発達とともに月世界に人間が立つ時代である。この小文をお読みに

なる皆様の目に一体どううつったのであろうか？。地震計による観測，ヘリコプターによる観測，機動力による対策，情報処理による民心安定，ダム工事による泥流のエネルギー減殺，石灰投入による河川の汚染防止などきわめて現実的なニュースが目にうつったと思う。入山規制により大物忌神社のある山頂まで行けなくなったことなど今と昔のちがいを〝まざまざ〟とかんじるのは，あながち筆者一人ではあるまい。

さて鳥海山の火山活動そのものは今も昔も変りはない。3月1日は新山（2237m）の東側斜面に小爆発をともなって新火口ができ，主としてこの火口から黒色噴煙をふき上げた。黒煙は降灰現象をともない鳥海山の東側斜面は一面真黒になり，火山活動再開の姿をまのあたり見せつけた。新しくできた火口の周りは硫黄が付着して真黄色になっていた。この噴煙はやがて噴気にうつり，山麓の人達や関係者をほっとさせたが3月5日早朝に灰色噴煙を高さ200mほど噴き上げ，外輪山をこえて南側にたなびき初めた。注意してみると3月1日の降灰範囲と別に南東方向に新しい降灰がみつかったので，3月4日夜半に黒色噴煙があったものと推定された。しかも外輪山の虫穴（むしあな）などまで噴出口ができ活動範囲がひろがった。しかし噴出口の配列はみられるが，いぜんとして散在しており地形変化をもたらす程度の裂か形成は生じなかった。3月6日早朝に新山の新火口より小規模の泥流発生がみられ，いご小康状態に入った。しかし3月6日いご新火口にみられる火山の表面活動はないものの地下における地震活動はけいぞくし，エネルギーの蓄積の可能性があるので表面活動の推移を注意深くみ守ることにした。その変化は早くも1ケ月ごの4月6日に現れた。こんどは場所をかえて荒神岳西側斜面の古い割れ目内であった。空中観測は山岳気象に注意しなければならないので山体とやく1000mはなれて飛行することにしている。この時は200mまでちかづいた。高さ10m位の噴気が数ケ所に確認された。この時点で今回の活動の大方の目安をつけた。地震計の記録の解析，降灰や泥流物質の分析もほゞすんでおり，新しいマグマ物質が確認されなかった。いわゆる水蒸気爆発の型である。だが荒神岳噴煙開始がおくれると融雪期に入る。積雪期での活動による地熱により雪が融けて地下水となる量はひじょうに少なく問題にならない。しかし融雪期には一晩雨がふると積雪が1mもへるといわれる。この時期の泥流は大規模になる可能性があるので，泥流対策に問題が集中した。4月24日に活動が再開した，鳥海山にも雨がふっていた。だが雨量はそう多くないので中規模泥流とふんだ。大方の予測量の泥流にとどまり，災害もなく終ったのである。

昭和49年4月28日における鳥海山
荒神岳割れ目にある噴出口より黒色噴煙をふきあげる。荒神岳，新山のまわりは降灰で真黒になった。

（理学部　教授）

郷土博物館所蔵史料と経済史研究

森　　芳　三

Ⅰ．本学の博物館はいろいろの特色をもっているが，とくに所蔵している古文書のぼう大なことは，広く知れ渡った一大特色である。もっともそこで整理されたものは図書館に移されるので，その分まで含めて云うのが本当であろうが，それにしても非常に多いのは事実である。図書館と郷土博物館それぞれおよそ五万点ということであるから，おそらく全国大学の中でも有数のものであろう。

私は一人の利用者の立場から多少の紹介をしてみたいが，そのまえに史料の整理．分類．管理等．利用に供せられるまでの仕事や出し入れの仕事が大変なことを知っている者として，担当の方々の労を感謝したいと思う。

Ⅱ．所蔵史料のなかには貴重なものもかなり多い。米沢の中条家文書の類はその最たるものであろう。さらに近世．近代史．経済史の側からみても博物館は素晴しい史料の宝庫であり，その第一には大石田の二藤部家文書があげられる。最上川舟運史．地主史．商業史の上で，

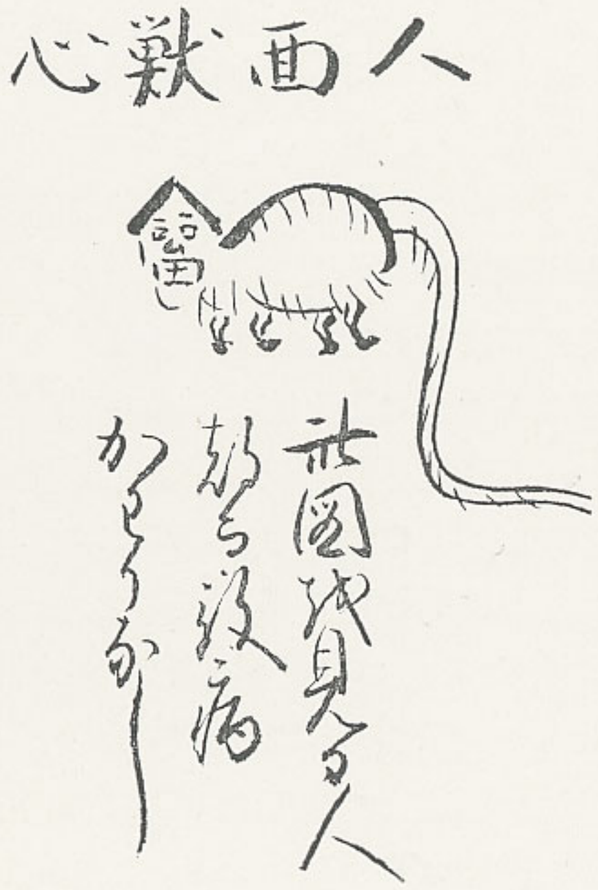
研究上多大の貢献をしてきた。また商人，地主の史料はこのほか，山辺町大蔵の稲村家，朝日町の今井家，大石田の渡辺家などがあり，私自身も，工藤定雄教授（館長）の斡旋を得て秋野家（加茂町）の調査研究に従ってきている。大石田町大字横山の寺崎家，天童の村形家などのものは，近代の行財政史上，有益な史料である。これらの史料は長い年月の集積であり，博物館の歴史そのものと云ってよく，多くの先輩や，卒業生の努力の積み上げの賜であるのは勿論である。そんなわけで，近世，近代史の研究には多大の成果があげられているし，今日では博物館史料なくしては，山形県の歴史を具体的に叙述することは困難と思われる。「山形県史」の最近刊のなかには，「慈恩寺史料（寒河江市高松）」や「村明細帳集」があるが，これらは本館提供のものである。また同じ「商工業編」も多大のお蔭をこうむっている。研究の面では，近代関係者が少く，それだけ近世史上の成果が光っているのであるが，近代史志望者にも沃野が広いことを知っていただきたい。

Ⅲ．近代史関係のうち地主制研究，地方行財政史については前述したが，産業史上の史料について多少ふれてみよう。本県は，衆知のように，米穀のほか，かつては養蚕，製糸業の盛んなところであったし，また紅花は広く知られた特産物であった。最上川はその重要交通手段であった。幕末開港とともに，海外市場の影響は多様でも甚大でもあり，産業，経済の仕組みがいわば再編されていったものである。京都の最上屋家史料は，紅花取引の漸減．生糸取引に変るいきさつを，具体的に示してくれている。

蚕卵紙，生糸の取引が刺戟をうけたことは誰でもが知るところだが，本県では士族授産のための米沢製糸場，松山町の松岡製糸場が代表であるが，民間製糸場では成田村（現長井市）の佐々木宇右衛門工場が最初の一つであった。彼は絹糸問屋．地主であって，京．大阪から横浜へ切りかわってゆくなかで，工務省による国産機械によって工場を設立した，多分明治七年の事であった。本館にその史料の一部がある。最近私がみた宮内町の酒田屋も上方と取引している商人であるが，手紙などをみていると，幕末，維新期の経済状況はもちろん，政治や国際事情に非常に敏感で，情報を絶えず連絡し合っているその丹念さに驚かされる。

なお商人の維新期の手紙は解読が難事で，あて字，暗号など自在に用い，字体のくずれもあり，ひとかたならぬ骨折である。（後出一例を紹介）本館に亀岡（高畠町）の鈴木吉兵衛家工場（明治二十年設立）の史料もあるが，一般に製糸織物業経営史料の残存は少く本館にも乏しい。

Ⅳ．商人文書には，よく当時の世相が敏感に反映する。それは物価の動き，景気の動向が必ずしも経済的要因によってばかりでなく，現実にある，あるいは予想されるその他の要因が織り込まれてくるからである。酒田屋文書には幕末，維新期の動きが詳かに手紙で伝えられ，先行きが見定められている．例の“ええじゃないか”の動きも，次第次第に各地に噂され，お札来降を祈願している様子など伝えているのは面白い。今日のところ，関東以北に及んだことは考えられていない。また，佐々木文書には左の図のように人面獣心によせて「会津」勢を揶揄した記事を伝えている。表面難じていないところが一興であって，説明の文章も面白い。



例えば，下図は国中動，市中強，道中潤，家中固と読む。この調子の文章が続き，金賀入，加賀危，軍賀始，下賀痛なども書いている。いくさが始まると，下々の民は痛み入った次第だというわけである。

a

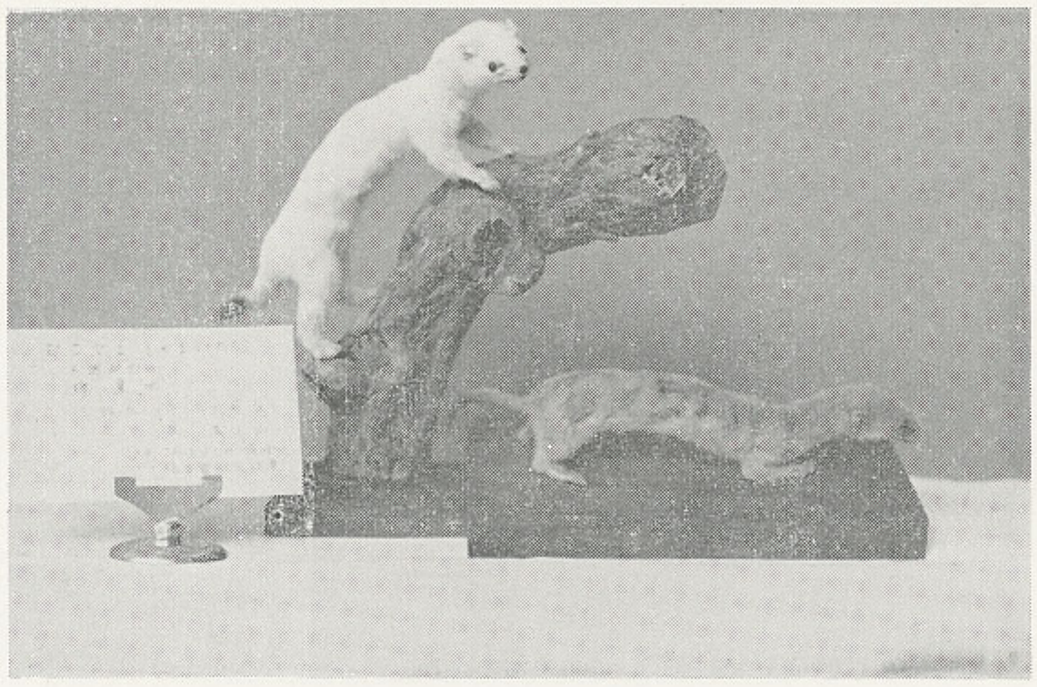
市	家	国
潤	中	道
動	固	強

b

加	下	金
始	賀	軍
入	痛	危

さて，以上のように私のかかわりにおいて多少史料を紹介したところであるが，博物館の行事の時など，関心を寄せて接していただければと思う次第である。

（教養部　教授）



展示資料紹介　　天然記念物おこじょ

予習不足で博物館まいり

石　島　庸　男

「イギリスとインド」という岩波新書がある。吉岡昭彦先生はイギリス経済の専門家で，インドへ2～3ヶ月旅行した成果がこの本なのだ。イギリスとインドが「金枝篇」のような構造にあったことが実に巧みに描れている。百聞・百勉は二見三見を見事に生かすということだそうだ。

博物館の「モノ」を一つ説明するのは易い。しかし，日本ではそれも見学者の読力にまかせている。外国のとあるところでは，見学者の専門によって説明役をかえ，説明するというより，対象そのものを素材として質疑・討論・談笑しながら，研究の交流をするということである。これは，一面ではその素材が，研究史やそれぞれの専門の論理の中に位置づけられ，生命をよみがえされる。博物館を見学し，中沢先生の話をおききしていて，ふと思ったことであった。

とはいっても，私が日本教育史の授業で，一度は必ず博物館見学をとり入れたのは，こうした意義を認めたためではなかった。3年前，どうしても予習がまにあわなかったので，苦しまぎれにごまかしたのがきっかけである。9割以上の学生が見たこともない，知らないとあって，急遽，中沢先生に頼みこんでコマが出たかどうか。

説明は御願いし，特に日本教育史に関係なさそうなものばかり。ただ前後どちらかに課題は出す。見学して自分の目で見，頭を働かせて新発見せよ。そして日本教育史的位置付を試みよ。事前の場合には，中沢方式の位置づけ方に学び，残った時間で自由に見学しながら，半分うんざりしながらも目を光らす。事後の時は再び見学に行かざるをえない。自由な見学の際は，いっしょにみてまわる学生と「問う博物館」の実験をする。多分，私が一番良い勉強になっている。

それからレポートを提出させ，それらをスクラップブックに張って公開することにした。一人の発見は見た人すべてのものになり，見た人すべての発見は一人びとりのものになろうかとの一つのあわい魂胆である。

その二・三を紹介すると

A：大学入学し三年目にして，はじめてお目にかかることができました。こんな機会がなかったら何も見ないまま卒業していったのではないかしら。でも1回目見た時はただものめずらしくてキャツキャツとさわいでたので何も発見できなかったのです。それでも何か書かなくては……と思い又友だちと二人で博物館に行き，必死になって新発見をしてきました。ジャーン！いづめこ人形に髪の毛がなかったことです。博物館のそれはつるつるでした。思うに男の子をモデルとした人形か，あるいは昔は，赤ちゃんの髪の毛を短くしていたかのどちらかだと思うのです。今の人形は商業主義的に可愛らしくしているけど，現実的な人形を見たような気がしてうれしかった。それともあの人形，もとはあった髪の毛が誰かからむしられたのかしら。

B：草刈ガマ，昔は今より左ききに対する偏見が強かったと考えられるのに，左手用のカマが展示されていてびっくりしました。……手づくりで，生活や労働に合った道具をつくるなど……

C：でんでん太鼓が和紙ではってあるのは湿気によって音色が違い，赤ちゃんにもおもしろがられるし，子守りがそれによって気湿を知ったり子ども天気予報なども？……

中沢先生の御話はこっそりテープにとってあるので，これでテキストを作り，それをもって自由見学にしようかとも考えている。多くの学生が見るようになれば，当然，本来の日本教育史の史料に限ってと考えている。勿論，授業ではできるだけ参考となるような実物や写真は見せるようにしており，私の新発見？もスクラップブックの最後にのせることにしてある。ただし，恥づかしいので学生以外には公開しないつもりである。

恥づかしいといえば，こんないいかげんな授業をやっているのかといわれそうで，ペンも重い。

きちんと授業と結合したり，研究のため利用するには，予算を大巾に増額したり，定員をつけて総合資料館としてでも独立させることが望ましいと私個人はひそかに思っている。社会教育が近年とみにさわがれ，盛んになってきているのに，昔ながら，日本は教育や研究にお金をかけない伝統がある。これをこそ，そろそろ博物館に入れてもよさそうなものではないかと思う。

（教育学部　助教授）

郷土博物館成立の思い出

長　井　政太郎

昭和五年山形県師範学校教諭を拝命したが，着任して間もなく文部省より郷土研究の指導に必要なる郷土資料の収集の為千八百円が配当された。山形県師範学校では早速歴史担当の美濃部道義教諭を中心として歴史地理担当の宮城栄昌，地理の長井，国語の安達嘉之太，手工の村田精，博物の橋本賢助等の郷土研究委員会が組織された。当時の千八百円は中々の大金で委員の全員が毎週土曜日曜を返上して調査に出張したが使い切れず，衝立，陳列棚，製図机等，手当り次第に買い込み，東京に出張しては厳南堂あたりの山形県に関係した出版物を買い込

んだのであった。翌年は増額されて四千八百円が配当されたので，東京では古本の相場が変ったと称された程，各学校の郷土資料買い込みが続けられたのであった。当時山形県では角南視学官，岡野徳右ヱ門視学を中心として郷土研究の指導が行たわれ，県下の小学校に対して，郷土研究に立脚した学校指導案の研究が命ぜられていたので山形県内の各学校に郷土研究熱が勃興し，私共の研究も頗る便利であった。女子師範学校では郷土室を建築し，その中に五万分の一大模型を製作され，研究資料を何冊か出版されたのであった。私共の研究は山形県郷土研究資料目録として出版され，安達教諭の収集された山形県方言集も出版され県内の各学校と全国師範学校等に寄贈された。当時山形県教育会が西村山郡の郷土博物館を移管した郷土研究博物館を経営していた。　三浦新七博士，師範学校嘱託の五十嵐晴峰先生，安齊徹山形高等学校教授，橋本賢助山形師範学校教諭等がその運営に当って居られた。教育会館が設けられた折，新館が建てられたのは博物館と講堂を設ける必要から建てられたと言われていた。西村山郡の博物館は西村真次早稲田大学教授が指導して寒河江の石田，慈恩寺等で発掘された出土品を中心としたものであったが，それがそのまま，県教育会の郷土博物資料となり，それに三浦先生等の収集された資料が陳列されていた。戦時中私もその委員を命ぜられていたのであったが，教育会館の新館が海軍に徴用されることになったので主事の大沼与吉氏より私に郷土博物館の保管を委託された。当時の男子部長は学校で引受けることに反対され長井が個人として預かることは差支えあるまいとの事であったから生物関係の資料以外一切を引受けて山形師範学校女子師範学校の郷土室と合併することになり，どうやら博物館らしい形が出来上った。大体考古資料，歴史資料，地理資料，美術資料，庶民生活資料等に分類されるものであったが，一方　三浦新七博士収集の古記録類の保管を委嘱されたので，私共も古文書の収集に着手することになった。当時学校には郷土資料収集の費用も無かったので山形師範学校同窓会の援助を受け，大学になってからは，父兄会の補助を得てどうやら博物館の運営が細々ながら続けられた。この間において歴史担当の丸岡真幸氏が考古資料の発掘をつとめられ，それを博物館に陳列されたので次第に内容が豊富になり，文部省より博物館として指定を受けられる迄に発展することになった。古記録類の数は長谷堂の須貝家，大蕨の稲村七郎左ヱ門家，荒谷の村形一雄家，深沼の武田作右ヱ門家，高松村の工藤喜兵衛家より多量の寄贈があったので全国的に誇れる収集のもととなった。山形市長の大久保伝蔵氏は古文書購入費十五万円，丸久デパートより十万円を寄贈され，更に福島県の佐久間寿一郎氏より会田算左ヱ門著作の和算書の寄贈が松岡教授の仲介で行なわれ，東京の皆川健次郎氏より最上徳内の研究資料が寄贈されいよいよ資料が豊富になって来た。　大学になってからは，教育学部より大学に移管となり，博物館運営委員会が出来て予算もつくようになったが，最初の頃は年額五万円に過ぎなかった。大学の元事務官の佐々木三之助が仲介されて文部省より八十万円の設備費も交付されたので，設備の方もどうやら博物館らしい形になった。鈴木庄一郎教授が生物標本の整備に尽力され，故伊倉伊三美教授が植物標本の整備に尽力され，長く運営委員長を勤められた故市村毅教授の鉱物標本の整備に尽力された事等によって今日の姿が出来上ったのである。

古記録類は約十万点を数える程になったが，その整理は専ら工藤寅之助氏が中心として当られたのであった。収集資料は，中沢勝磨氏等によって印刷に附せられる様になってからは，他大学の研究者にも利用される様になった。博物館の資料収集には，松浦二郎氏の献身的な協力があった事が忘れられない。特に中条文書の入手に骨を折られたのであるが，参議員議員の北畠教真氏が文部省に運動されたことも後に文部省より特別に支出されることとなるのである。最近　柏倉亮吉教授の収集された出土品数が加わったので，出土品の収集物は一層豊富になったのである。郷土室が出来てから退官まで博物館の運営に当ったので，私の個人的色彩の強い博物館になってしまったが，現在では運営委員による運営が行なわれているのであるから大学の博物館らしいものに成長することであろう。小さい博物館でも成立する迄には多数の方々の好意によるものであった。

（山形大学名誉教授・元館長）

博物館利用状況　（入館者数）

年度	成人	団体	大学生	団体	児童生徒	団体	総数
		〃		〃		〃	人
47	927	40	346	133	18	108	1,572
48	958	22	250	171	19	100	1,520
49	890	146	199	143	16	317	1,711

山形大学附属郷土博物館報　No. 2
1975. 10. 1 発行
編集兼発行人　山形大学附属郷土博物館
（〒990）　山形市小白川町一丁目4－12